

学位論文の要旨

三 重 大 学

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻臨床医学系講座 産科婦人科学分野	氏 名	西岡 美喜子 にしおか みきこ
<p>主論文の題名 Pregnancy Rates after Hysteroscopic Endometrial Polypectomy versus Endometrial Curettage Polypectomy: A Retrospective Study</p> <p>主論文の要旨 背景と目的：子宮内膜ポリープは不正出血や不妊症の原因となり、女性の 7.8～34.9%、不妊症女性の 15～24%に発生すると報告されている。内膜ポリープは子宮粘膜の局所的な茎状突起で、栄養血管を中心とし、腺および間質の過形成によって生じる。エストロゲン受容体がポリープの腺上皮で過剰発現していることから、内膜ポリープ発生にはエストロゲン曝露の関与が示唆されるが、その病因は未解明である。内膜ポリープ切除術は慢性子宮内膜炎および術後の妊娠成績を改善すると報告されている。内膜ポリープ切除術の従来法は麻酔下での内膜搔爬術によるものである。子宮内膜搔爬術では胎盤鉗子やキュレットを用いて非目視的にポリープ切除するため、ポリープ以外の内膜組織を損傷する危険性がある。一部の症例では、術後の内膜菲薄化により妊娠率の低下を疑う場合がある。近年、子宮鏡を用いた直視下の内膜ポリープ切除が普及している。スネア、細径切除鏡、経腔細切器等、様々な器具を用いた子宮鏡検査・処置が報告されている。内膜搔爬術では内膜組織を多く除去するのに対し、子宮鏡下手術では内膜ポリープのみを切除できる利点がある。しかし、子宮鏡下スネア切除術では技術習得に時間を要することや、細径切除鏡や経腔細切器の設置およびランニングのコストを要する欠点がある。</p> <p>子宮内膜ポリープ切除術実施による体外受精の妊娠成績の向上については報告されているが、ポリープ除去術の方法と妊娠成績を検討した研究はわずかである。本研究は、子宮内膜ポリープ切除術後の体外受精-胚移植の成績を、子宮鏡による直視下での切除術と子宮内膜搔爬術で後方視的に比較検討し、内膜ポリープ切除術について評価することを目的とした。</p> <p>方法：2017年1月から2020年12月の期間に4施設で、体外受精-胚移植の前に経腔超音波検査で子宮内膜ポリープを疑い、ポリープ切除術を行った434例を対象として後方視的に解析した。主要評価項目は内膜ポリープ切除後の胚移植妊娠率である。副次項目として流産率、生児獲得率、年齢、移植胚を確認した。</p> <p>結果：子宮内膜ポリープ切除術を、子宮鏡群157例（平均年齢35.0歳）、搔爬群277例（平均年齢37.3歳）に行った。このうち単一胚盤胞移植を子宮鏡群148例（平均年齢35.0歳）、搔爬群196例（平均年齢35.9歳）に行った。背景を一致さ</p>			

せるため、両群から年齢を一致させた148例を抽出した。年齢を一致させた148例では、術後初回の胚移植妊娠率は子宮鏡群68.2% (オッズ比 (OR):2.14)、掻爬群51.4%(OR:1.06)、OR 2.03であった。術後2回目の胚移植妊娠率は子宮鏡群80.4% (OR:4.10)、掻爬群68.2% (OR:2.14)、OR 1.91であった。生児獲得率は子宮鏡群66.2%(OR:1.956)、掻爬群53.4%(OR:1.15)、OR 1.71であった。流産率は両群間に有意差はなかった。

考察：子宮内膜ポリープは女性不妊症において頻度の高い疾患であり、近年は慢性子宮内膜炎との関連が報告され、反復着床不全の誘因と疑われる場合には内膜ポリープ切除術が多く実施されている。子宮鏡下ポリープ切除術後と内膜掻爬術後の妊娠転帰を比較した報告はわずかであり、本研究では子宮鏡下内膜ポリープ切除術を行った症例と、軟性子宮鏡を用いて内膜ポリープを確認後に子宮内膜掻爬術を行った症例で、術後の体外受精-胚移植の妊娠成績を検討した。単一胚盤胞移植例で年齢を一致させた148例で比較したところ、術後の胚移植妊娠率および生児出産率は子宮鏡群が掻爬群よりも有意に高かった。この結果は、内膜掻爬術と比較し子宮鏡下内膜ポリープ切除術の有効性が高いことを示している。流産率は両群で有意差が見られず、ポリープ切除術の方法は流産率へ影響は少ないと考えられる。

結論：子宮内膜ポリープ切除後の体外受精-胚移植の妊娠率は、内膜掻爬術よりも子宮鏡下ポリープ切除術の方が高かった。子宮鏡下内膜ポリープ切除術の実施体制を確立することが重要である。